64

Ernest Hemingway
For Whom the Bell Tolls

Copyright © 1940 by Ernest Hemingway

Published under licence of Mikasa Shobo, Tokyo,
the holder of rights to print and publish in Japan.

© 1968

世界文学全集 64 Printed in Japan

誰がために鐘は鳴る

訳者 大久保康雄

昭和43年8月10日初版
昭和49年12月20日15版

編 集 株式会社 綜 合 社
101 東京都千代田区神田神保町3の6の5
電話 東京(239)3811
発行者 陶 山 巌
発行所 株式会社 集 英 社
101 東京都千代田区一ツ橋2の5の10
電話東京(265)6111 振替 東京15653
印 刷 凸版印刷株式会社

落丁，乱丁本はお取りかえします 0397-114064-3041

世界文学全集

誰がために鐘は鳴る

ヘミングウェイ

訳 大久保康雄

64

編集委員（ABC順）
原　久一郎
中野好夫
奥野信太郎
鈴木信太郎
手塚富雄

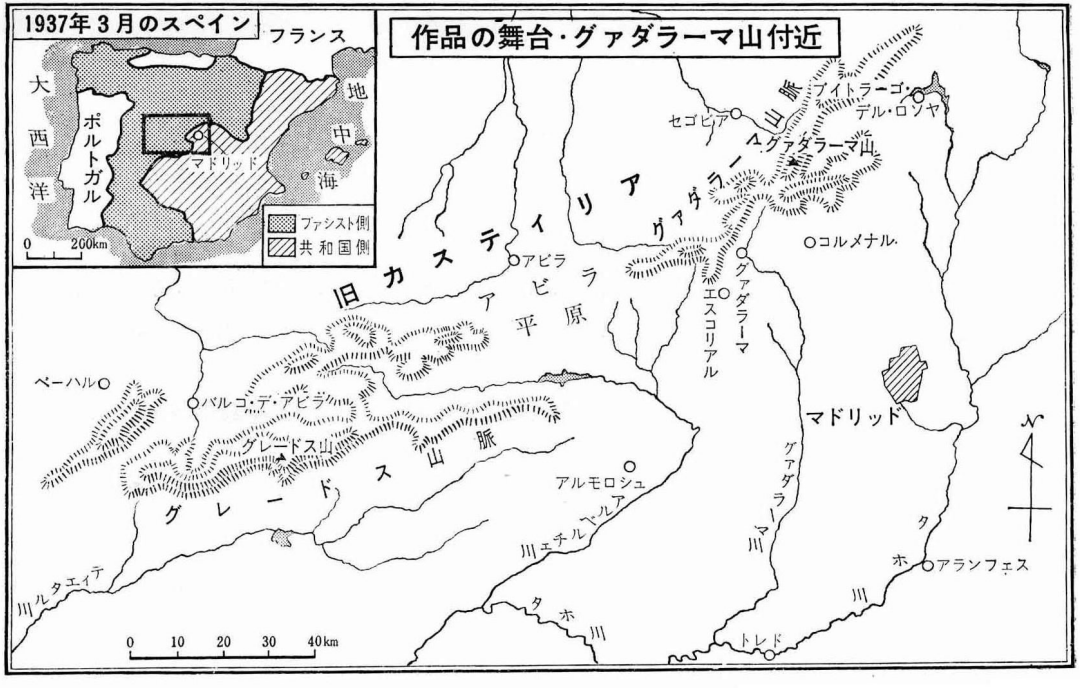
装幀
伊藤憲治

挿絵
沢田重隆

目次

誰がために鐘は鳴る　大久保康雄訳　5
後記・注解　436
作家と作品　ヘミングウェイ I　石一郎　438
年表　463

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong


1937年3月のスペイン
フランス
大西洋
ポルトガル
マドリッド
地中海
0 200km
ファシスト側
共和国側
作品の舞台・グァダラーマ山付近
旧カステイリア
アビラ平原
グァダラーマ山脈
ブイトラーゴ・デル・ロンヤ
セゴビア
グァダラーマ山
コルメナル
アビラ
エスコリアル
グァダラーマ
ベーハル
バルコ・デ・アビラ
グレードス山
グレードス山脈
マドリッド
アルモロシュ
グァダラーマ川
川エチルベルア
ホ
アランフェス
川
タホ川
トレド
川ルタエイテ
0 10 20 30 40km
N

誰がために鐘は鳴る

主要登場人物

ロバート・ジョーダン　イギリスさん、またはロベルトとよばれるアメリカの青年。故国の大学でスペイン語の講師をしていたが、スペインに内乱が起こり、ファシストによって彼の愛するスペイン民衆の生命と自由と幸福がおびやかされるのをみて共和派の側にくわわり、特務機関の指令をうけてゲリラ隊といっしょにグァダラーマ山中の橋梁爆破にでかける。そこでマリアと出会い熱烈な恋におちいる。

マリア　共和派の父を暴徒に殺され、自分も丸坊主にされ、凌辱をうけた十九歳のスペイン娘。そのあと、ピラールたちにかくまわれる。小麦色の肌、金色がかった蘆色のひとみ、陽気な目もと、豊かな唇がくっきりしている美しい娘。ジョーダンに清らかではげしい恋情をよせる。

パブロ　グァダラーマ山中の洞窟にひそむジプシーの頭目。かつてはゲリラとして蛮勇をふるったが、追われるのに疲れて気が弱くなり、臆病者になりさがっている。背は低いが肩幅が広く、大男にみえる。ジョーダンとことあるごとに対立する。

ピラール　パブロの妻。五十がらみの大女で、熱狂的な共和派支持者のジプシー。マリアを自分の娘のように保護し、かわいがる一方、わが身の安全ばかりはかっているパブロに愛想をつかし、夫にかわって頭目になる。

アンセルモ　老ジプシー。ジョーダンを目的の橋へ案内し、その爆破を手伝う使命をうけている。素朴に勝利を信じて生命を捧げる熱心な共和派。

つんぼおやじ（エル・ソルド）　パブロたちの洞窟の近くにいるジプシーの頭目。白髪で、インディアンのようなかぎ鼻をした勇敢な共和派のゲリラ。

ゴルツ　共和派の将軍で、ジョーダンに橋梁爆破の指令をあたえる。

アグスティン　パブロの部下。長身で、くぼんだ目、うすい唇をしていて、なにかといっては「わいせつな」という形容詞をつけるくせのあるジプシー。

プリミティボ　パブロの部下。平べったい顔の、命しらずのジプシー。

フェルナンド　パブロの部下。頭はにぶいが、戦うことと、命令されたことを実行することにかけては比類がない。

アンドレス　パブロの部下。ジョーダンの密書をもってゴルツのもとへ伝令に行く。

マーサ・ゲルホーン*に

なんぴとも一島嶼にてはあらず
なんぴともみずからにして全きはなし
ひとはみな大陸の一塊
本土のひとひら　そのひとひらの土塊を
波のきたりて洗いゆけば
洗われしだけ欧州の土の失せるは
さながらに岬の失せるなり
汝が友どちや汝みずからの荘園の失せるなり
なんぴとのみまかりゆくもこれに似て
みずからを殺ぐにひとし
そはわれもまた人類の一部なれば
ゆえに問うなかれ
誰がために鐘は鳴るやと
そは汝がために鳴るなれば

ジョン・ダン*

彼は林のなかの褐色の松葉の散りしいた上に、組みあわせた腕に顎をのせて腹ばいになっていた。頭上の高い松の梢を風が吹きわたっている。山腹は、彼が寝ているあたりは傾斜がゆるやかだが、そこから下はけわしくなっていて、山峡を越えて曲がりくねっているアスファルトの道路が、くろぐろと見える。道路にそって小川が流れており、山峡のはるか下のほうの流れのほとりに製材所が見え、落下するダムの水が夏の日ざしのなかで白く光っている。

「あれがその製材所か？」と彼はきいた。

「そうでがすよ」

「記憶がないな」

「あれは、あんたがここへきてから建ったですだ。古いほうの製材所は山峡のずっと下、うんと下のほうになりますだ」

彼は写真複製の軍用地図を林の地面にひろげて、しさいに眺めた。老人が、その肩ごしにのぞきこんだ。背の低い頑強なからだつきの老人で、農夫の着る黒いスモック（上着）に、鉄みたいにごわごわした灰色のズボンをはき、縄底の靴をはいている。山を登ってきたので息づかいがあらく、ふたりが運んできた二つの大きな荷物の一つに片手をのせて休んでいた。

「すると橋はここからは見えないわけだね」

「さよう」老人が言った。「このへんは山峡でも楽なところで、川の流れも、ゆるやかになっていましてな。下の道路が木立ちのなかに曲がりこんで見えなくなっているあたりで、川が急に落ちこんで、けわしい峡谷になっていて——」

「おぼえている」

「橋は、その峡谷にかかっていますだよ」

「それで、やつらの哨所は、どことどこにあるのかね？」

「あすこに見えるあの製材所に一つありますだ」

このあたりの地勢をしらべていた若い男は、色のあせたカーキ色のフランネルのワイシャツのポケットから双眼鏡をとりだし、ハンカチでレンズをふき、接眼部をまわしていたが、やがて製材所の板が急にはっきりと映ってきた。扉のわきの木のベンチ、回転のこぎりのある差掛け小屋の背後に積みあげてある山のようなおがくず、川の対岸の山腹から材木を流しこむ用水路などが見えた。

レンズに映る流れは、澄んで、なめらかに見え、落下する水の波紋の下で、ダムからの水の飛沫が風に吹きとんでいた。
「歩哨はひとりもいないようだな」
「煙が製材小屋からあがっているし」と老人が言った。
「それに網に服がかかっておりますぜ」
「それは見えるが、歩哨の姿は見えない」
「きっと、やっこさん、日陰にいるだよ」と老人は説明した。「あすこは、いまじぶん暑いだからね。わしらには見えねえ陰にはいりこんでいるんでがしょう」
「そうかもしれないな。つぎの哨所は、どこにあるんだ？」
「橋の下でさ。この峠から五キロくだった道路工夫の小屋にありますだよ」
「あそこには何人くらいいるのかね？」と彼は製材所を指さした。
「兵が四人に伍長ひとりくらいなもんでがしょう」
「それで、下のほうには？」
「もっといますでしょうな。あとで、たしかめてきましょう」
「それから橋のところには？」
「いつもふたりいますだ。両端にひとりずつな」
「おれたちも若干必要だが」と彼は言った。「何人くらい集められるかね？」
「何人でも、あんたのほしいだけ集められますだよ」老人が言った。「いまは、ここの山にも大勢おりますでな」
「どれくらいいるかね？」
「百人以上いるでがしょうな。けんど、みんな小部隊にわかれていますでね。人数は、どれくらい必要なんですかい？」
「それは橋をしらべたうえで言うことにしよう」
「橋のほうは、いますぐしらべてえんで？」
「いや、さしあたっては、この爆薬をいよいよというときまでかくしておく場所へ行ってみたい。できるなら、橋から三十分以内の距離のところに、もっとも安全にかくしておきたいのだ」
「そいつはわけありませんや」と老人が言った。「わしらの目的地から、その橋までは、ずっと下り坂になっていますでな。だが、いまそこへ行きつくには、ちっとばかり馬力をかけて登らにゃならねえですよ。腹はすきなすったかね？」
「すいている」若い男は言った。「だが食事はあとまわしだ。ところで、きみは、なんという名まえだったかな。忘れたよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

忘れたというのが老人にはおもしろくなかった。
「アンセルモ」老人が言った。「アンセルモと呼ばれていましてな。バルコ・デ・アビラの人間でがすよ。その荷物、かつがしてあげましょう」
若い男は、上背があり、やせていて、日光が縞になって当たっている頭髪が美しく、風雨にきたえられた日やけした顔をして、陽光に色あせたフランネルのワイシャツに百姓ズボンをはき、縄底の靴をはいており、身をかがめて包みの革ひもの一つに片腕を通すと、重い荷物を、ぐいと肩にほうりあげた。それから、片方の革ひもにも腕を通して荷物の重みを背中に安定させた。さっきまで荷物が当たっていた部分のワイシャツが、まだ汗でぬれていた。
「さあ、かついだぞ」と彼は言った。「どう行けばいいのかね？」
「登るんでさ」アンセルモが言った。
荷物の重みに身をかがめ、汗をかきながら、ふたりは山腹一面に生いしげっている松林のなかを、しっかりした足どりで登っていった。踏みつけ道らしいものは、若い男には一つも見わけられなかったが、しかしふたりは骨を折って登ってゆき、山の斜面をまわり、やがて小さな流れを渡った。老人はしっかりした足どりで、さきに立って流れの岩床の端を登っていった。登り道は、いよいよけわしく、いっそう骨が折れてきたが、それでもやっと、頭上にそそり立つ、つるつるした花崗岩の岩棚の端の向こうで流れが急に落ちこんでいるらしいところへ出た。老人は、岩棚の根もとで若い男が追いついてくるのを待った。
「だいじょうぶだかね？」
「だいじょうぶだ」と若い男は言った。ひどい汗で、腿の筋肉が、けわしい傾斜を登ってきたため、ぴくぴく痙攣していた。
「とにかく、ここで待っててくんなさい。さきへ行って連中に注意してきますだよ。あんただって、そんな代物を背負って鉄砲弾をくらいたくはねえでしょうからね」
「冗談にもごめんだよ」と若い男は言った。「遠いのか？」
「すぐそこでさ。連中は、あんたのことを、なんと呼んでるだね？」
「ロベルトと言っている」と若い男は答えた。彼は荷物をずりおろすと、川床の側の二つの岩塊のあいだに、そっと置いた。
「それじゃ、ロベルト、ここで待っててくんなさい。

すぐまたもどってきますでな」
「よし」と若い男は言った。「しかし、きみはこの道をおりて橋のところまで行くつもりか？」
「いんや。橋へ行くときにゃ、もう一つの道を行くだよ。そのほうが近くて楽だでな」
「橋からあまり遠いところへ、これをしまっておきたくはないんだが」
「あとでわかるだよ。そこが気にいらなけりゃ、また別のところを捜すさ」
「そうしよう」と若い男が言った。
彼は荷物のそばに腰をおろして、老人が岩棚を登ってゆくのを、じっと見まもっていた。登りにくいところではなかった。べつだん捜しもせずに手がかりを見つけていくそのやりくちから、老人が、以前、幾度となくそこを登ったことのあるのが、若い男にもわかった。しかも、だれが登ったにしろ、彼らは、ひどく注意ぶかく、何一つ痕跡を残してはいなかった。
若い男は、ロバート・ジョーダンという名であったが、おそろしく空腹を感じ、それに不安でもあった。飢えをおぼえたことは何度もあるが、不安を感じるというのは、ふだんないことだった。
アンセルモは、いい案内人だったし、山のなかを旅することにかけては、おどろくほど達者だった。ロバート・ジョーダンも歩くのは達者だったが、夜明け前から老人について歩きまわって、この男に本気で歩かれたら、こっちがくたばるとわかった。ロバート・ジョーダンは、これまでのところ、このアンセルモという人間を、万事につけて信頼していた。ただし判断力については別である。まだ老人の判断力をためしてみる機会がなかったからだが、どのみち判断は、こっちの責任になっているのだ。いや、彼が気にやんでいるのは、アンセルモに関することではなかった。また橋梁（きょうりょう）の一件にしても、他の多くの問題以上にむずかしいことではなかった。彼は、どんな種類の橋梁であろうと、指定されたものを爆破する方法を知っているし、事実また、大小さまざまの構造の橋梁を爆破してきているのである。たとえ、その橋がアンセルモの報告より二倍も大きいとしても、二個の荷物のなかには、それをみごとに吹っとばすにじゅうぶんな爆薬と装置一式とが用意されているのだ。というのも、その橋は、一九三三年、彼が徒歩旅行でラ・グランハへ行く途中渡ったことがあるので記憶に残っているし、また一昨夜、エスコリアル宮（マドリード西北にある宮殿および修道院。図書館、両廊も有名）の外の家の、あの二階の部屋で、ゴルツから、その橋の説明を読んできかされていたからである。

「橋を爆破すること自体は、意味のないことなのだ」髪の毛を剃りあげた傷痕のある頭の上にランプが光り、えんぴつで大地図の上をさしながら、ゴルツは言ったのである。「攻撃のために定められた時間にもとづいて、指示された時刻に橋を爆破するということが重要なのだ」

ゴルツは、えんぴつに視線を落とし、それから、それで歯をこつこつとたたいた。

「すると、橋の爆破は、いつやればいいのですか？」とロバート・ジョーダンはきいた。

「攻撃開始後だ。攻撃開始の直後。それ以前ではいけない。そうすれば、増援部隊が、この道を登ってやってこないだろうからね」彼はえんぴつでさした。「何ものにも、この道を登ってこさせてはならぬのだ」

「それで、攻撃はいつですか？」

「それは、いずれ教える。だが、その日時は、ただ攻撃の可能性を示すものとして利用してもらいたい。そのときにそなえて準備してもらわなければならぬ。攻撃が開始されてから、きみは橋を爆破するのだ。いいかね」彼はえんぴつでさししめした。「やつらが増援部隊をもってこられるのは、この道しかない。やつらが戦車や砲を運びあげることができるのも、あるいはトラックを山越えの間道に動かすことができるのも、この道しかない。わしは、その間道を攻撃する。わしは橋が吹っとんでしまっていることを知らなければならぬ。攻撃の前では、だめだ。前にやったのでは、攻撃が延期された場合、修理ができる。ぜったいに前ではいかん。攻撃がはじまったときに爆破しなければならぬ。そして、橋のなくなったことが、わしに、はっきりしていなければならぬ。きみといっしょに行く男は、なかなか頼もしいやつだそうだ。その男は山のなかに仲間をもっている。きみが必要とするだけの人数をとりたまえ。人数は、できるだけすくなく、しかし必要なだけじゅうぶん使ってもらいたい」

「そちらで攻撃が開始されたことを、わたしはどうして判断すればよろしいのですか？」

「攻撃は全師団を動員して行なわれる予定だ。準備行動として、まず空爆をやる。きみは、まさかつんぼではあるまい？」

「では飛行機が爆弾を投下したら攻撃が開始されたものと考えてよろしいのですね？」

「いつもそうだと考えてもらっては困る」とゴルツは言い、首を横に振った。「だが、こんどの場合は、そう考えてよろしい」

「わかりました」とロバート・ジョーダンは言った。

「どうも、あまり好ましい仕事ではなさそうですが」
「わしだってそうだよ。手に負えぬと思うんなら、いまのうちに、そう言ってもらいたい」
「やります」ロバート・ジョーダンは言った。「りっぱにやりとげます」
「わしにとって何より肝心なのは知ることだ」ゴルツが言った。「つまり、何ものをも、あの橋を渡らせてはならないのだ。これはぜったいにたいせつなことだ」
「わかりました」
「わしは、きみに納得がいくように、そして、あらゆる可能な困難や重要性がのみこめるようにと、きわめて慎重に説明しているのだ」
「それで、もしあの橋が爆破されたら、あなたは、どんなふうにして、ラ・グランハへ前進するのですか？」
「われわれは、あの山越えの間道を総攻撃してから、橋を修理する準備をととのえて前進する。わしは例によって、不足の兵力でやるわけだ。だが、それにもかかわらず、これはきわめて可能性のある作戦なのだ。あの橋が爆破されれば作戦は成功する。いいかね、どういうふうにやるかを教えてあげよう」
「いや、かえって、うかがわないほうがよさそうです」ロバート・ジョーダンは言った。
「そうか」ゴルツは言った。
「いつもわたしは、作戦のことは、むしろ知りたくないのです。そうすれば、たとえどんなことが起こっても、わたしがとやかく言われることはありませんからね」
「それは、かえって知らないほうがいい」ゴルツはえんぴつで額をなでた。「だが、橋のことについて知っていなければならぬことだけは心得ているだろうな？」
「それは知っています」
「わかってくれているものと、わしは信じる」ゴルツが言った。「まあ一杯やろうじゃないか。やたらとしゃべったので、喉がからからだよ、同志ホルダン。きみの名まえはスペイン語で呼ぶと変わっているな、同志ホルダウン」
「ゴルツというのは、スペイン語では、どう発音するのですか、閣下？」
「ホッツェだ」と、ゴルツは、にやにやしながら、まるでひどいかぜで咳きこんでもいるかのように、喉の奥のほうで声を出した。「ところで、バルチザンの仕事を、きみはどう思うかね？」
「非常に気にいっていますよ」とロバート・ジョーダンは言って、にやにや笑った。「戸外の大気のなかで、すこぶる健康的です」

「わしも、きみの年ごろには非常に好きだった」とゴルツが言った。「みんなの話だと、きみは橋梁爆破の名人だそうだね。非常に科学的にやるというじゃないか。こいつはたんにうわさだがね。きみの仕事ぶりを、まだ一度もこの目で見たことがないのでね。もしかしたら、まだ実際には何もやっていないのじゃないのか。きみは、ほんとうに爆破をやるのかね？」こんどは、からかう調子になっていた。「こいつを一杯やりたまえ」彼はスペイン産ブランデーのグラスをロバート・ジョーダンに渡した。「ほんとうにきみはやるのかね、橋梁爆破を？」

「たまにはね」

「こんどの橋では、たまにはなんてことは、願いさげにしたほうがいいだろうな。いや、あの橋のことをいうのはよそう。あの橋のことは、もうきみにはじゅうぶんわかっている。われわれは、まったく真剣なのだ。だから、とんだひどい冗談もとばせるというわけさ。ところで、戦線のあちら側には女の子がたくさんいるかね？」

「いや、女の子と遊ぶひまなんかありませんよ」

「そういう考え方は、どうかと思うね。軍務が不規則になればなるほど、生活も不規則になるものだ。きみの仕事は、ひどく不規則だ。それに、きみは散髪の必要があるようだな」

「自分の散髪は必要に応じてやります」とロバート・ジョーダンは言った。頭をゴルツのように剃られるのではたまらないと思ったのであろう。「女の子がいなくても、わたしには、いろいろと考えることがありますよ」と彼は、ふきげんな顔をして言った。

「わたしはどういう制服を着ればいいのですか？」とロバート・ジョーダンはきいた。

「制服なんかいらんよ」ゴルツが言った。「きみの散髪も、どうだっていい。からかっただけさ。きみという男は、わしとは、だいぶちがっているようだな」ゴルツはそう言って、また二つのグラスに、酒をなみなみとついだ。「さあ、こいつをあけて、それから出かけたまえ。万事わかったね？」

「はい」とロバート・ジョーダンは言った。

ふたりは握手をかわした。彼は一礼して外へ出て、参謀用の自動車のところへ行った。自動車のなかでは例の老人が居眠りをしながら待っていた。その車で彼らはグァダラーマを過ぎる道路をとばしていった。老人はまだ眠りこんでいた。

彼がゴルツと会ったのは、それが最後だった。けっして日やけすることのない異様なほど白い顔、鷲のような目、大きな鼻、薄い唇、横じわと傷痕のある坊主頭の

男だった。明日の晩、彼らはエスコリアル宮の外の真っ暗闇の街道を進軍しているだろう。闇夜のなかに、歩兵を乗せたトラックの長蛇の列、重い装備をしてトラックによじのぼる兵隊、トラックに機関銃をかつぎあげる機関銃隊、戦車運搬用の車体の長いトラックの上へ渡し板を使って運びこまれる戦車、山越えの間道攻撃に向かって闇夜をついて出動する師団。いや、そんなことは考えまい。そんなことは自分のあずかり知らぬことだ。それはゴルツのやるべき仕事だ。おれのやるべきことは、ただ一つしかない。それをこそおれは考えるべきだし、そのことをはっきりと考えぬいて、あとは、何ごともなりゆきにまかせるべきであって、気をもんではいけないのだ。気をもむのは恐怖をもつのと同じくらい愚劣なことだ。それは、ものごとを、いっそうむずかしくするのが落ちだ。

彼はいま流れのそばに腰をおろして、岩間を流れる清らかな水の流れるさまを見つめていた。流れの向こうにみずたがらしの深い茂みがあるのに気がついた。流れを渡り、両手いっぱいにそれを摘みとると、泥だらけの根を流れできれいに洗って、また荷物のそばにすわりこみ、そのきれいな冷たい青葉や、歯切れのいい、ぴりぴりからい味のする茎をかじった。流れのふちに膝をつき、流れに口をつけて水を飲んだ。水は痛いように冷たかった。

両手でからだを起こして横を向くと、老人が岩棚をおりてくるのが見えた。老人といっしょに、もうひとりいたが、その男も、この地方ではまるで制服のようになっている農夫の着る黒いスモックに暗灰色のズボンをはき、縄底の靴をはいて、背に騎兵銃をかついでいた。男は無帽だった。ふたりとも、まるで山羊のように岩をはいおりてくる。

ふたりがそばへくると、ロバート・ジョーダンは立ちあがった。「Salud, Camarada,（こんにちは、同志）」と彼は銃をかついだ男に言って微笑した。

「Salud,（こんにちは）」と相手は気のすすまぬ調子で答えた。ロバート・ジョーダンは、短く頭髪を刈りこんだ濃いひげ面を眺めた。顔は、ほとんどまんまるで、頭もまるくて肩にめりこんでいるようだ。目は小さくて、目と目の間隔がやけに広く、耳も小さくて、頭のすぐそばにくっついている。身長は、かれこれ五フィート十インチ、大きなからだで、手足も大きい。鼻はつぶれていて、口の片すみが切れており、顔一面のひげの密生のなかから、一条の傷痕が、上唇から下顎にかけて見えている。

老人は、この男に向かってうなずき、ちょっと笑った。「この男は、この土地のボスでがすよ」と言って、にや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong